

「食が生むしあわせ」

ものがたり診療所・ものがたり訪問看護ステーション

城北クリニック

竹内 満

本日のもくじ

- はじめに
- 医療におけるナラティブ（ものがたり）的な視点
- ものがたりとしての「イノチ」
- 社会参加と参加
- 事例を通じて

私は、砺波市のものがたり診療所／ものがたり訪問看護ステーションをベースにしています。勤務は週3日です。1日は、金沢市京町にあります城北クリニックにて訪問リハビリテーション（訪問看護ステーションつくし）や、グループホーム等への訪問評価を行っています。

本日は、高齢者医療、在宅医療、終末期医療といわれる場で、リハビリ専門職である私が、大事にしていること、正しくベースに据えていることをお話させていただきます。内容の多くは、医療法人社団ナラティブホーム理事長・ものがたり診療所所長である佐藤伸彦の受け売りです。もし興味を持たれたら、ぜひ著書『ナラティブホームの物語』（医学書院）を手にお取りください。私の話より遙かにものがたりとして完成しています。

配布資料としては、秋田県の伊藤先生が地方紙に投稿された記事のみといたしました。わかりやすくまとめられているので、理解しやすいと思います。

では、他愛のない話でも聞くようにお過ごしください。

医療におけるナラティブ（ものがたり）的な視点

ナラティブとは英語で「語り、ものがたり」という意味です。最近では、医療現場でもナラティブベースド・メディスンという言葉を目にする機会も増えてきました。患者さんの語る「ものがたり」に耳を傾け、病気にだけ焦点を当てるのではなく、病とともに生きる患者さんを全人的に捉える視点がそこにはあります。

そして、その人のものがたりは多種多様です。だからこそ、わたしたち医療者は病気を見る専門家である前に、病気を持った人と関わることを大事にしていかねばなりません。患者さんの語りには、強いメッセージがあり、聴く者に大きな気づきと発見を与えてくれる可能性があります。

世の中にはだまされやすものが3つあります。1つは女性の涙。2つ目は新聞記事。3つめは各種の統計数字です。ただ、イギリスの小説家で劇作家であるサマセット・モームは「絶対間違いのない統計は、人間の死亡率は100%であること」と言っています。

人はこの世に生まれてから死を背負って生きています。死を見つめるということは、それまでの生をどう生きるかを見つめることです。いつか人には終わりや別れがやってきます。悲しんだあとも、それぞれが愛する気持ちやつながりを感じながら、日々を前向きに生きていくこと、それが人生です。人生において、何かおかしいぞ、腑に落ちないぞという時には立ち止まり、振り返り、一緒に考えることが大切です。